

## 高校生の認知および行動の特性と 学習動機づけとの関連

学籍番号 249208

氏 名 越島 淳子

主指導教員 四辻 伸吾

副指導教員 水野 治久

### 1. 児童・生徒の現状と課題

不登校数、いじめ認知件数は、近年増加の一途をたどっている。COVID-19以降の対人関係スキルの低下は否めず、教育格差、外国ルーツの文化的課題、児童虐待認知件数の増加など、福祉と連携すべき課題もある。特別支援教育のニーズも増えている。

### 2. 高等学校の生徒および教員の現状と課題

高校でも不登校は深刻化している。対人関係の複雑化、進路の多様化による不安などで学校への適応困難が増加している。特に学業不適応は進級や卒業にかかわって深刻な問題である。

生徒の多様化・困難化により教員の負担は増大しているが、組織としての支援体制の整備は依然不十分である。ICT活用や探究学習など新たな教育課題も増え、疲弊感が高まっている。

### 3. 日本における特別支援教育の歴史・沿革

盲・聾・知的障害・病弱児教育が民間から始まり、徐々に公立化していった。戦後1947年に盲・聾・養護学校が制度化され、1979年に養護学校の就学もようやく義務化された。

2001年に「特殊教育」から「特別支援教育」へ名称が変更され、2007年には発達障害を含む全ての障害児が支援の対象となった。

2006年の障害者権利条約を受けて合理的配慮が義務化され、共に学ぶ環境整備が推進され、インクルーシブの教育体制が構築されるようになった。

近年では、2018年に「高校通級」が制度化された。医療的ケア児支援法の成立もあり、支援体制が拡大した。

### 4. 高等学校における特別支援教育の現状と課題

長く体制整備は遅れたままであったが、2009年以降発達障害児の支援の必要性が示され、2018年には「高校通級」が開始された。しかし、小・中学校と比して、制度的にも、人的にも、意識的にも遅れをとっている。

## 5. 現行の教育課程の評価と課題

現行の学習指導要領では、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点別評価が導入されている。

3つめの観点においては、粘り強さ、振り返り、見通しを持つ学習が評価対象となり、学習者の自律性が強く期待されている。これは、自己調整学習の「予見」「遂行」「省察」が求められているともいえる。しなし、認知や行動に特性を持つ生徒は計画的な取り組みや振り返りが苦手であり、課題未提出・低評価・進級不安・学業不適応など深刻な影響が生じている。

## 6. A高等学校の現状と課題

A高等学校は、全日制普通科の高校で、卒業生の95%以上が大学に進学する。

2020年に「高校通級」が自校通級で導入された。組織としての体制は徐々に整備されたが、担当者間の協働や指導内容の共有においては課題がある。

報告者は、国語科教員であり、教育相談担当や特別支援教育コーディネーター、通級担当の経験がある。

## 7. 実践課題研究の取り組み

A高校でも学校生活への不適応を示す生徒が増えたように感じる。特別支援教育の意識は徐々に浸透しているが、通級指導等への理解も不統一で、試行錯誤状態であるといえる。

そのような状況下において、本研究では、通常学級、一斉授業で、特性の高い生徒がなぜ学業に苦戦するのか、を明らかにすることを目的とする。

調査手続きとしては、A高校2年生（文系）の約255名にGoogle Formsにより、プロフィールに続いて、認知行動特性、学習方略、自律的学習動機に関する51項目の質問紙調査を実施した。仮説としては、①特性の高い生徒は、低い生徒よりも学習方略得点が低い、②特性の高い生徒は、低い生徒よりも自律的学習動機「内的調整」低い、と考える。

結果として、認知行動特性は「環境適応困難」「指示理解困難」「整理管理困難」の3因子に分類された。学習方略は「振り返り」「創意工夫」の2因子に再構成され、自律的学習動機は先行研究通り4因子が確認された。

特性と学習方略・学習動機の間には複雑な関連があり、特に「整理管理困難」が学習困難の中心的要因であると考えられる。特性の高い生徒は内発的な動機では学習に結びつきにくく、「取り入れ的調整」「同一化的調整」が学習方略を促す傾向が示された。

## 8. 総合考察

認知行動特性尺度は、特性把握のアセスメントとして有用と推察するが、「整理管理困難」が特に重要な指標であり、支援の視点となると考える。特性は動機づけにより学習方略と関連することから、特性に見合った動機づけ向上が学習促進の鍵となる。

特性の高い生徒には、達成感を得られる支援や承認を得られる経験、将来を見据えた目標設定が特に重要である。